

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：13903

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13261

研究課題名（和文）日中韓の英語教科書に見る女性表象 男女共同参画社会を目指した英語教材のあり方

研究課題名（英文）Representation of Women in English Textbooks Used in Japan, China, and Korea: Textbook Analysis Aiming to Create a Gender-Equal Society

研究代表者

石川 有香 (Ishikawa, Yuka)

名古屋工業大学・工学（系）研究科（研究院）・教授

研究者番号：40341226

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本、韓国、中国（北京および台湾）で使用されている英語教科書をジェンダーの観点から分析し、女性および男性が教科書の中でどのように表象されているのかを明らかにするものである。教科書のテキスト、挿絵、写真を網羅的に収集し、客観的に分析する手法を確立し、教科書ジェンダー表象データベースを構築した。データベースの一部はインターネット上で公開している。研究成果は、国際学会・国内学会での研究発表42件、国際共同研究者との図書出版を含み、図書8冊と論文18本の刊行の他、公開シンポジウムを開催した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、英語教育を通して、異なる立場の人々への理解を深めること、特に、身近な他者である異性を理解し、男女共同参画社会の構築に対して、積極的に貢献していこうとする態度を養うことを目的として、英語教科書のあり方を模索するものである。

本研究では、日本の英語教科書の時系列的調査を行うとともに、中国や台湾、韓国など、日本とよく似た文化的背景を持つ東アジアの英語教科書を調査し、英語教科書に表象されている「女性」を、縦（時系列比較）と横（国際比較）の観点から分析するためのデータベースを構築した。

研究成果の概要（英文）：School textbooks often have a decisive influence on the formation of the students' worldview. Therefore, gender representation in textbooks has been widely studied to date. However, many of the previous studies tended to 1) focus exclusively on stereotypical gender representation, 2) choose the data arbitrarily, 3) use the predetermined analytical categories, and 4) discuss only the text. These limitations seemed to have lessened the reliability and replicability of the analyses. Therefore, adopting a new analytical approach, this study 1') focused on any type of gender representation, 2') used a more extensive range of data, 3') avoided dependence on predetermined analytical frameworks, and 4') discussed the combined effect of text and illustrations. This study is expected to contribute to realizing gender equality and quality education, both of which are included in the seventeen Sustainable Development Goals (SDGs) to be achieved by 2030 (UNESCO, 2015).

研究分野：英語教育

キーワード：教科書分析 ジェンダー 海外比較 データベース イラスト

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 1. 研究開始当初の背景

学校教科書は、児童や生徒が最も頻繁に使用している書籍と言える。一般に、1年間またはそれ以上の年月をかけて学習に用いられ、教室内でまたは家庭において、時には覚えるまで、繰り返し読まれている。学校教科書は「権威」であり、そこには、「正しい」知識が適切に記載されていると考えられている。そのため、教科書に記載されている事柄は無批判に受け入れられる可能性が高い。わずかな分量や小さな挿絵であっても、人種や民族、性に対するステレオタイプが示されていた場合には、次世代への子供たちに偏見や差別的な考え方を植え付けてしまう危険性がある。学校教科書が学習者に及ぼす影響は、小さくはないと言えよう。

一方、英語教育においては、目的のひとつとして、異なる立場の人々への理解を深めることがあげられている。異性は、生徒の最も身近な他者であり、異性への理解、すなわち、男女共同参画社会への貢献も、これからの英語教育に強く求められる課題となっていると言えよう。これまでもジェンダーの観点から日本・中国・韓国のそれぞれの英語教科書を分析した研究は、いくつか行われてきた。しかしながら、分析対象や分析範囲が限定されているものが多かった。共通プロトコルを用いて網羅的に分析を行い、比較を可能とすることで、それぞれの社会の英語教科書のジェンダー表象全体の傾向を明らかにしようとする分析調査はいまだ行われていない。

## 2. 研究の目的

本研究は、英語教育を通して、異なる立場の人々への理解を深めること、特に、身近な他者である異性への理解、すなわち、男女共同参画社会の構築に対して、積極的に貢献していこうとする態度を養うことを目的として、英語教科書のあり方を模索するものである。そのため、本研究では、日本の英語教科書の時系列的調査を行うとともに、中国や台湾、韓国など、日本とよく似た文化的背景を持つ東アジアの英語教科書を調査し、日本の英語教科書に表象されている「女性」を、縦（時系列比較）と横（国際比較）の観点から分析するためのデータベースを構築することを目指す。

教科書のジェンダー表象分析に対しては、これまで、主観的であるとの批判があった。本研究によって作成されたデータベースは、客観的分析を可能とする。また、それぞれの文化に特有の事項だけではなく、ジェンダー表象の全体的傾向を把握することや、国際比較も可能にする。

## 3. 研究の方法

本研究では、欧米に比べて男女格差が大きいとされる日中韓(世界経済フォーラム, 2013)およびアジアで最も格差が小さいとされる台湾の中学校英語教科書を取り上げる。

まず、分析のための共通プロトコルを設定して、研究協力者の分析手法の共通化を図る。日本・男女共同参画社会の構築を目的として、中国・台湾・韓国の中学校で使用されている英語教科書を、ジェンダー表象の観点から分析する。テキストだけではなく、挿絵や写真も調査の対象とする。客観的・網羅的にデータ化を行い、結果を一元化することによって、中学校英語教科書のジェンダー表象データベースを作成する。

テキストについては、どのような場面で、誰が誰に向かって、何のために話しているのかなど、場面設定の情報も取り込んでいく。こうした情報は、従来の教科書テキストコーパス分析では捨象されてきたものとなる。また、挿絵・写真については、たとえば、スポーツをする男性、スポーツをする女性など、前もって設定した枠組みに当てはまるものだけを取り出すのではなく、すべての画像データを等しく客観的に数量化する。そのために、共通プロトコルに沿って、挿絵・写真に描かれた人物を、画像で切り取るとともに、言葉で描写してテキスト化する。

なお、挿絵や写真の分析プロトコルに関しては、社会学においてジェンダー表象の分析を行っている内外の研究者からも知見を得る。

## 4. 研究成果

研究成果としては、図書8冊と論文18本の刊行、学会発表42件となる。下記にいくつかの研究発表概要をあげる。

### (1) 挿絵・写真に描写された人物の性

現行の中学校英語教科書では、同数の男女が中学生登場人物として描かれていることが多い。また、後で見るように、中学校英語教科書では主な英語教員は女性として描かれている。そのため、挿絵・写真の中の人物の性は、男女同数または女性の方が多くと予測されたが、2016年に使用された日本の中学校英語教科書に掲載された挿絵・写真を調査したところ、描写されている人物は、女性よりも男性の方が多くことが分かった。人物の女性率では、3年間平均して、女性の数は、男性の数のおよそ9割にとどまることが分かった(石川(編), 2020)。

### (2) 女性に使用されている敬称の種類

日本の中学校英語教科書において女性に使用されている敬称を調査した。女性の敬称については、1970年代にMsが新しい敬称として英語に取り入れられてから、Miss/Mrs/Msの使用について様々な議論がなされてきた。中学校英語教科書ではどのような扱いを行っているのか、調査を行なったところ、英語の教員が女性の場合には、いつもMsが用いられて

いることが分かった。また、出版社によっては、全ての女性に対して、Msのみを使用している場合があることも分かった。一方で、Missはどの教科書にも記載されていないことが分かった。特定の歴史的人物への言及の他、ホームステイ先のホストマザーやクラスメートの保護者に対しては、多くの教科書で、Mrsが使用されていた。なお、DrやProfなど、両性に使用できる敬称は、女性に対して使用されていなかった。Mrsを使用している教科書を見てみると、出現頻度は高くはないが、特殊な使用となっていた。語彙説明においても、MsとMrsの使い分けにあいまいな記述が多く見られた。女性の敬称の導入をMsに絞った場合には、実際のコミュニケーションにおいて使用されているMissやMrsを導入しなくてもよいのか、という批判も聞かれるところではあるが、女性の敬称を混在させた場合には、女性に対して特定の種のステレオタイプ化が行われる可能性がある。特に、男女共同参画社会の構築を目指した指導においては、敬称は、取り扱いに注意が必要な項目であると考えられる(石川(編), 2020)。

### (3)英語教員の性別

文部科学省の学校教員統計調査によると、2016年度の中学校での英語教員の女性比率は、およそ65%とされ、国語とともに高い数値を示している。ただし、社会や数学では、女性比率が約25%~30%と低い数値になっており、科目の偏りが見られることが分かる(<https://www.e-stat.go.jp/>)。一方、英語指導助手(ALT)については、女性比率は38%であったとする調査もある(上智大学, 2017)。現行の中学校英語教科書の人物紹介で描かれている主要な英語教員を見てみると、日本人英語教員は1名のみで、男性であり、ALTは、全員、女性であることが分かった。本文においても、日本人英語教員は男性の割合が高く、ALTは女性の割合が多くなっていった。なお、その他の教科書の日本人教員については、男性の割合が高くなっていることが分かった。

結果として、女性は、若く、生徒とよく似た趣味を持ち、日本語や日本文化を「学ぶ」状態にあるALTとして描かれ、男性は、教員免許を持つ日本人教員として描かれることになっていた。男性は、さまざまな科目の教員としても描かれている。ロールモデルとしてみると、男子生徒の将来の選択肢が広く示されていると言える。一方、女子生徒には身近なロールモデルは提示されていない。なお、男性教員が上司となり、女性のALTを指導する構図は、挿絵にも見られた。

男女共同参画社会の推進を目的とした場合、あらゆる場面で男女が均等に描かれ、ステレオタイプが生じないようにすることが望ましい。しかしながら、現実社会において、すでに、パイロットは男性、受付案内係は女性といったジェンダー・ステレオタイプが刷り込まれている場合には、男女を平等に描写するだけではステレオタイプの払拭は難しい。石川(2017)では、教科書には、一般的なジェンダー・ステレオタイプとは異なる性の表象を行うという、SIM(Stereotype Inversion Model)を提唱している。ジェンダー表象のあり方は、今後の教科書作りの課題の一つとなると考えられる(石川(編), 2020)。

### (4)挿絵の女性率の日中比較

共通プロトコルを使用して、日本・中国・台湾の教科書に使用されている挿絵・写真に示された人物の女性率を調査し、比較を行った。教育制度に差があるが、いずれも、中学校教科書を調査の対象とした。中国は2種類、台湾は3種類の教科書を分析している。世界経済フォーラムによる2018年のジェンダー・ギャップ指数では、日本は110位、中国は103位となる。同様の指数を用いて積算したところ、台湾は32位になるとされる。日本の国会議員の女性率がおよそ10%に留まる一方で、台湾の場合は約40%を女性が占めている。2016年には女性の総統が誕生している。また、台湾の女性の教員比率は日本よりも高い。教員は女性に偏っていると言えるほどである。それでも、校長の女性比率を見てみると、日本よりもかなり高いが、教員比率と比較すると、まだ低くなっている。ただし、都市部に限って見た場合には、小中学校では女性の校長率は約50%となる(台湾教育部統計所, 2019)。挿絵・写真の調査を行ったところ、女性率は、中国では、日本と同じ9割であることが分かった。また、台湾でも、1社は、日本・中国と同じ9割を示しているが、後の2社は、男女がほぼ同数に揃えられていることが分かった(石川(編), 2020)。

### <引用文献>

- 相川真佐夫・石川有香・原隆幸(2019)「東アジアの英語教科書に見る女性表象・男性表象 男女共同参画社会の推進を目指して」『全国英語教育学会第45回弘前研究大会予稿集』232-233.
- 石川有香(2017)「学校教科書に見るジェンダー表象 量的研究と質的研究の融合」(「言語研究と統計 2017」口頭発表)
- 石川有香(編)(2020)『ジェンダーと英語教育 学際的アプローチ』大学教育出版
- 上智大学(2017)「小学校・中学校・高等学校におけるALTの実態に関する大規模アンケート長打研究」[https://www.bun-eido.co.jp/aste/alt\\_final\\_report.pdf](https://www.bun-eido.co.jp/aste/alt_final_report.pdf)
- 台湾教育部統計所(2019)「教育統計查詢網」<https://depart.moe.edu.tw/ed4500/>

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 石川有香	4. 巻 44
2. 論文標題 中学校英語教科書に描かれた女性像 - パイロット・スタディ -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 全国英語教育学会京都研究大会発表予稿集	6. 最初と最後の頁 123-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 原隆幸	4. 巻 42
2. 論文標題 ヨーロッパにおける複言語・複文化能力の指標 日本への示唆を求めて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学言語文化論集 VERBA	6. 最初と最後の頁 58-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 原隆幸	4. 巻 41
2. 論文標題 日本語教育における文化項目の特徴 CEFRとJF日本語教育スタンダードを比較して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 水谷信子記念 日本語教育論集	6. 最初と最後の頁 1-
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石川有香・伊東田恵・浅井淳	4. 巻 3
2. 論文標題 工業系大学生の英語学習観: 習熟度・性別・専攻分野の影響: 「私の英語学習」をテーマにした英作文コーパスの分析結果を踏まえて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Learner Corpus Studies in Asia and the World	6. 最初と最後の頁 135-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi: 10.24546/81010123	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yuka Ishikawa	4. 巻 145
2. 論文標題 Needs Analysis of Japanese Engineers' English Use Focusing on Technical Vocabulary	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Advances in Social Science, Education and Humanities Research	6. 最初と最後の頁 76-81
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi:10.2991/iconelt-17.2018.18	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 原隆幸	4. 巻 6
2. 論文標題 台湾の大学における卒業要件としての英語力	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Studies in English Teaching and Learning in East Asia	6. 最初と最後の頁 9-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原隆幸、木下正義	4. 巻 17
2. 論文標題 日本におけるデジタル教科書導入の可能性と課題 韓国の事例と比較して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 LET Kyushu-Okinawa BULLETIN	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口晶彦、原隆幸	4. 巻 41
2. 論文標題 科学技術英文読解の一考察 言語的諸特徴とESPの理論的進展から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 鹿児島大学言語文化論集 VERBA	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石川有香	4. 巻 5
2. 論文標題 Gender-freeかGender-fairかー現代英語における職種名称の使用パターン	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日英言語文化研究	6. 最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川有香	4. 巻 374-374
2. 論文標題 English Vocabulary for Engineers 9000の開発	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会的要因の着目した応用言語学研究における量的アプローチ (統計数理研究所 共同研究レポート)	6. 最初と最後の頁 129-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川有香, 伊東田恵	4. 巻 46
2. 論文標題 ESP教育対象としての「工学系英語学習者」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中部地区英語教育学会紀要	6. 最初と最後の頁 253-256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊東田恵・石川有香	4. 巻 42
2. 論文標題 英語の課外活動が英語力に及ぼす影響の調査	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 第42回全国英語教育学会埼玉研究大会発表予稿集	6. 最初と最後の頁 572-573
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川有香	4. 巻 58
2. 論文標題 ジェンダーから見る辞書記述 新語収録の状況	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 GCD英語通信 2016年11月号	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計28件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 22件)

1. 発表者名 石川有香
2. 発表標題 中学校英語教科書に描かれた女性像 - パイロット・スタディ -
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuka Ishikawa
2. 発表標題 Gender images represented in English textbooks in Japan
3. 学会等名 2nd Women in TESOL (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tomiko Komiya, Hiroshi Yoshikawa, Yuka Ishikawa
2. 発表標題 Modality Expressions in Japanese English Reassessed from the Viewpoint of English as a Lingua Franca
3. 学会等名 Bilingualism Conference 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石川有香・相川真佐夫
2. 発表標題 ジェンダーの観点から見た東アジアの英語教科書について - 男女の役割に注目して -
3. 学会等名 大学英語教育学会 東アジア英語教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takayuki Hara
2. 発表標題 Integrating Language Skills and Project or Problem-based Learning
3. 学会等名 Macao Association for Advancement of English Language Teaching (MAELT) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takayuki Hara
2. 発表標題 Teaching Intercultural Understanding in English Education in Japanese Universities
3. 学会等名 Asia TEFL (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takayuki Hara
2. 発表標題 English Language Education and Globalization in Higher Education
3. 学会等名 The Association of Modern British & American Language & Literature (MBALL) (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 Takayuki Hara
2. 発表標題 Changes of English Education and Related Programs in Japanese Universities
3. 学会等名 Comparative Education Society of Hong Kong (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柏木哲也、蒲原順子、原隆幸
2. 発表標題 グローバル人材育成に求められるもの 言語、文化、適正 (シンポジウム) 発表タイトル: 高等教育におけるグローバル人材育成
3. 学会等名 大学英語教育学会 第57回JACET国際大会(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原隆幸
2. 発表標題 日本語教育における異文化理解能力育成の枠組み
3. 学会等名 第12回国際日本語教育及び日本研究シンポジウム 香港日本語教育研究会(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原隆幸
2. 発表標題 日本における異文化間理解能力育成の枠組み
3. 学会等名 第193回東アジア英語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuka Ishikawa
2. 発表標題 English Vocabulary for Engineers, EVE 9000
3. 学会等名 GloCall 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuka Ishikawa
2. 発表標題 Needs Analysis Of Japanese Engineers' English Use: Focusing On Technical Vocabulary
3. 学会等名 ICONELT 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuka Ishikawa
2. 発表標題 工業系大学生の英語学習観：習熟度・性別・専攻分野の影響 「私の英語学習」をテーマにした英作文コーパスの分析結果を踏まえて
3. 学会等名 LCSAW 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuka Ishikawa
2. 発表標題 A Study on Vocabulary Learning Strategies Used by Japanese Engineering Students
3. 学会等名 FOL 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小宮富子, 岡戸浩子, 石川有香, 吉川寛, 榎木園鉄也
2. 発表標題 多文化共生・英語学習・英語の多様性 に関する8大学での意識調査
3. 学会等名 大学英語教育学会 第56回JACET国際大会(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原隆幸・木下正義
2. 発表標題 韓国の英語教育におけるデジタル教科書導入の現状と課題 日本への示唆を求めて
3. 学会等名 外国語教育メディア学会 第46回 九州・沖縄支部研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Takayuki Hara
2. 発表標題 Integrated English Language Teaching in a Japanese University
3. 学会等名 2017 English Language Teaching Conference (MAELT) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 柏木哲也、原隆幸、木下正義
2. 発表標題 日本、韓国、台湾における英語教育政策と大学入試問題の現状と展望(シンポジウム)
3. 学会等名 大学英語教育学会 第56回JACET国際大会(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Takayuki Hara
2. 発表標題 A Comparative Study of Current English Language Education Policies in Korea and Japan
3. 学会等名 2017 PKETA International Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 原隆幸
2. 発表標題 香港の中等教育における教育言語の変遷
3. 学会等名 第182回東アジア英語教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takayuki Hara
2. 発表標題 Significant changes to teaching methods in higher education in Japan
3. 学会等名 Comparative Education Society of Hong Kong Annual Conference 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masao Aikawa
2. 発表標題 Learner Attitudes towards English in ESL Study Programs Abroad
3. 学会等名 2017/26th ETA International Symposium on English Teaching and Book Fair (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yuka Ishikawa
2. 発表標題 Gender-stereotypes in English textbooks used in Korea and Japan
3. 学会等名 The Korea Society of Sociolinguistics (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 石川有香
2. 発表標題 学校教科書に見るジェンダー表象 量的研究と質的研究の融合
3. 学会等名 統計数理研究所言語系共同研究グループ合同発表会 言語研究と統計 2017
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Komiya, T., Yhoshikawa, H., Ishikawa, Y.
2. 発表標題 Cultural Identity and English as a Multilingua Franca
3. 学会等名 ELF 9 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yuka Ishikawa
2. 発表標題 Development of English vocabulary list for engineering students
3. 学会等名 APCLC 2016 (October 21-23) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Yuka Ishikawa
2. 発表標題 Use of modal verbs in academic discourse: Comparison between professionals and graduate students in science, technology and engineering
3. 学会等名 Brno Conference on Linguistics Studies in English (12- 13 September 2016) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 伊藤 奈賀子、中島 祥子、森裕生、藤内哲也、高丸理香、出口英樹、近藤和敬、坂巻祥孝、中里陽子、寺西光輝、小野智司、下木戸隆司、廣瀬真琴、富原一哉、原隆幸	4. 発行年 2019年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 292
3. 書名 大学での学びをアクティブにする アカデミック・スキル入門〔新版〕	

1. 著者名 杉野俊子（監修）、田中富士見、波多野一真（編集）原隆幸ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 238
3. 書名 言語と教育 - 多様化する社会の中で新たな言語教育の在り方を探る -	

1. 著者名 石川有香ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 120
3. 書名 ESP語彙研究の地平 新しい工学英語教育の創造をめざして	

1. 著者名 伊藤奈賀子、中島祥子、岩船昌紀、渡邊弘、原隆幸、寺西光輝、山田隆行、出口英樹	4. 発行年 2017年
2. 出版社 鹿児島大学総合教育機構	5. 総ページ数 170
3. 書名 「初年次セミナーII」ワークブック 第2版	

1. 著者名 石川有香他（仁科恭徳他編）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 344
3. 書名 応用言語学の最前線－言語教育の現在と未来	

1. 著者名 石川有香他（井土康仁他編）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 フォーイン	5. 総ページ数 224
3. 書名 先生が薦める英語学習のための特選映画100選「大学生編」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	相川 真佐夫  (Aikawa Masao)  (60290467)	京都外国語大学・外国語学部・教授    (34302)	
研究分担者	原 隆幸  (Hara Takayuki)  (40572227)	鹿児島大学・共通教育センター・准教授    (17701)	